

臨死体験

彼が当時小学校4年生の時、確か6月頃の出来事。朝激しい腹痛に襲われ、母親と共にK町のT医院に行ったところ、盲腸と診断され即、入院。翌日の午後、盲腸摘出手術になった。手術は無事終わり、病室に戻り休養。確かおかゆみたいな味のない夕食（否、点滴だったか？）を頂き、看護婦さんに「何かあったらこのボタンを押して」と教えられたことをしっかり覚えて、眠りについた。仕事を終えた母親が、彼の睡眠中に付き添いに来た。

夜中の12時頃、彼は激しい呼吸困難で目が覚めると、母親は昼間の仕事の疲れで彼の布団に顔を埋め、ぐっすり寝入っていた。彼は息苦しい中、看護婦さんの言葉を思い出し、必死でボタンを探し、力の限りそのボタンを押した。しかしその直後、あの激しい息苦しさが静かに無くなり、スーッと意識も消えていった。

1時間位経った後（彼の母親が言うには）、周りをポリエチレンのシートに包まれ、シューシューと酸素吸入の音がし、自分の瞳孔を確かめるT医師のペンライトの光が眩しくて、思わず目を閉じ、顔を背けた自分を、彼は記憶していた。母親の話では、その間、彼の心臓は一時停止していた。T医師や看護婦さん達が必死で酸素吸入をしながら、彼の心臓に電気ショックを与え、心臓マッサージを繰り返した結果、彼の心臓は蘇生した。彼は意識を取り戻した。原因は風邪による腹痛を盲腸と誤診し（勿論、丁重な謝罪があった）、手術により急性肺炎を引き起こし、呼吸困難に陥った。彼は臨死体験をした。

この経験から「死」とは、あのように何の苦痛もなくなり、安楽で平穏な気分のまま意識が遠のき、消えていくもの、と彼は思った。

しかしこれを、シェリー・イェール大学教授（「DEATH イェール大学で23年連続の人気講義『「死」とは何か』の著者」）流に言えば、こうなるのだろうか？現にあなたは生きているのだから、この臨死体験から「死」をそう捉えているものの、それは「死」ではない。なぜなら、身体（ボディ機能）は心臓がこののち蘇生され、再び血液が循環したのだから、冷凍保存された体（人間に可能かは分からない）と同じで、「死」に至っていないのだろう。また、一時的に意識（パーソナル機能）がなくなっ（停止し）たが、心臓の蘇生と共に意識も蘇生されたのだから、夢も見ず眠っている状態と同じで、意識（パーソナル機能）も、まだ「死」に至っていなかったのだろう、と。

しかし、このような臨死体験をした彼の心臓の血管には、狭心症による2本のステントが入っている。この2本のステントが、何故自然な自分の心臓の死を妨げているのだろうか？そう、神様はこれまでの自分がしてきたことにまだまだ不満足で、そのステントで自分をまだ生きながらせ、もっと社会に貢献しなさい、と要求しているように思うと、彼は語った。